

見つけよう防災の種

災害後の共通した話として「怒り」を訴える人達が多いです。「避難勧告や避難指示が出なかった」「何の情報も流れてこないで動けなかった」「もっと早く避難勧告・避難指示を出してくれ」「避難勧告・避難指示が遅い！行政の責任は重い」などと口にする人が多いのに驚かされます。この発言をそのままとれば、「行政からの情報も無く災害に襲われた」これは異常事態であり市民が怒るのも当然のことだと思います。でも見方を変えればどうでしょう。その人達は他人から「逃げろ」といわれなければ逃げないのでしょうか？実際の話！ある市民が「家の前の川が氾濫しそう



だ。でも行政から何も言ってこないし大丈夫かな？」しかし、川の水は溢れだし、住宅は浸水、自家用車も浸かった。

その時にはもう避難すらできなくなっていた。そこで市民は「川が氾濫するなら早めに避難勧告を出してくれ」「浸水が進んでいるのに避難勧告が出ないから避難できなかった」「もう少し早くいってくれば自家用車だけでも免れたのに」更に「避難勧告がなかった。行政は何をしているんだ！」と市の職員に詰め寄り怒りをぶちまけたのです。

さて、この話の中で不思議なことに気が付きます。その市民は他人が「逃げろ」といわれなければ逃げないということです。自宅の前の川が普段とは全く違う状態になり、自分でも氾濫しそうだなと思ったにもかかわらず逃げない状況です。ここには過剰なまでの行政依存があります。これは昭和34年「伊勢湾台風」を契機に昭和36年に制定された日本の法律『災害対策基本法』によって生み出された市民の誤った防災感覚「防災は行政が行うもの！」「私たちは税金を払っている」という恐ろしい意識です。「私の命は行政が守ってくれる。何か起これば連絡が入り助けてくれるはず」というスーパー過保護防災といえる状態の「依存体質」に日本人はなってしまったのです。これは完全に間違った他者への過剰な依存心です。自分や自分の大切な人の命を行政とはいえ、どこの誰か知らない人に大切な命を丸投げし、依存するという意識が現在の日本に定着してしまっただけです。

ところが行政側もそれらの誤った意識に反発するきっかけとなったのが、あの阪神・淡路大震災です。

それ以降の大きな災害が発生する度に「行政には限界がある。自分の命は自分で守ろう」「地域の安全安心は自助・共助が大切だ」「自分たちのまちは自分たちで守ろう」と発信し始めました。しかし、これも誤った発信で、ここぞとばかりに行政側は、公助から逃げることを



発信し始めたのです。そのひとつには「ハザードマップづくり」です。「危険な場所はお知らせするので、あとは市民の方で判断してください」とスタートしたのです。市民としては、あれだけの大きな災害が連発して発生し、多くのメディアが「公助は当てにできないから自助・共助だ」を発信すると、それが正しいかのように多くの市民は思うようになりました。でも本当に自助・共助は正しいのでしょうか？

間違いなく自助・共助は誤りではありません。しかし自助と共助をしっかりと理解しなければ何の役にも立たないということです。「自分の命は自分で守る」のは当然のことであり、もしも災害が発生し目の前で救助を求める人がいれば助けるのも当たり前のこと。でも当たり前前のことを他人からいわれなければできないのが現状です。ここで逆を考えてみましょう。本当に他人からいわれられますか？過去の災害時を振り返ってみましょう。避難勧告や避難指示が発令されました。市民は逃げましたか？ある町では、危険が迫っているのでバスまで出してお迎えに行ったという事例もあります。本当に市民はバスに乗ったのでしょうか？



結果は、避難勧告や避難指示が発令されても、多くの市民は避難もせず、バスには一部の市民しか乗らなかったのです。危険が迫っていることが判っていても、行政側は市民を無理やり連れてはいけません。市民にお願いをするので「避難してください」と。不思議な光景です。公助というものが手を差し伸べても受け入れない。あれだけ自助・共助だといわれているにもかかわらず「命が助かるタイミング」で助かろうとしない。でも反対に、避難した市民もいるし、バスにも乗った市民もいる。皆様もお気づきでしょう！「助かりたい」という意識がなければ助からないし、いくら頑張っても助けられないのです。これは先月号でもお話しした「正常性バイアス」で、多少の異常事態が発生しても、正常の範囲内としてとらえ心を平静に保とうとする働きが、災害時には大きな邪魔をします。それを防ぐためには「冷静で高度な理性」が必要になります。簡単に言えば「私は助かる」という意識が必要ということです。自助とは「助かるという強い意志」のことです。そして、自分だけ助かったとしても強い悲しみが残ります。やはり家族、友達、近所の人にも助かることが重要で「共に助け合う意志の共有」これこそが共助となります。これらは日常生活の中で育む必要があります。その一歩が「あいさつ」。家族や近所の人たちと言葉を交わすことで「共に生きる力」が生み出されます。明日の朝、ご近所の人に「おはようございます」。この一歩があなたに「助かる」という強い意志「勇気」を与えてくれます！